

〔論 文〕

# 万延度本丸御殿大奥における室内意匠の構成

小 粥 祐 子

The Composition of the Decorative Interior of Ooku, Honmaru Residence  
inside Edo Castle, Built in the First Year of the Manen Period, 1860

Masako OGAI

The Tokugawa Shogun and their families lived in Ooku (Great Interior), Honmaru Residence inside Edo Castle. This research analyzes the composition of the decorative interior of 4 specific buildings located on the west side of Ooku which employed ten different plans in their construction during the Manen Period, 1860.

Many walls and ceilings of the rooms of the buildings are covered with papers called *shōhekiga* on which pictures have been drawn, or papers called *karakami* on which various colorful patterns have been printed. The author examines the use of *shōhekiga* and *karakami* in every room in the targeted buildings and demonstrates that they are used in three different ways depending on the room in which they are located. They are; Type 1: *shōhekiga* put on both ceilings and walls or sliding doors, Type 2: *shōhekiga* on ceilings and *karakami* on walls or sliding doors, and Type 3: *karakami* on both ceilings and walls or sliding doors.

In the formal official rooms Type 1 is most commonly seen. Type 2 is seen in rooms used for Shoguns and their wives' daily informal living. Type 3 is seen mainly in rooms used by servants or attendants. Based on these observations, the author suggests that the degree of quality of materials is proportionate to the hierarchy of residents in Ooku.

*Key words:* Ooku (大奥), Honmaru residence, Edo Castle (江戸城本丸御殿), built in the Manen Period (万延度), *shōhekiga* (障壁画), *karakami* (唐紙)

## 1 序

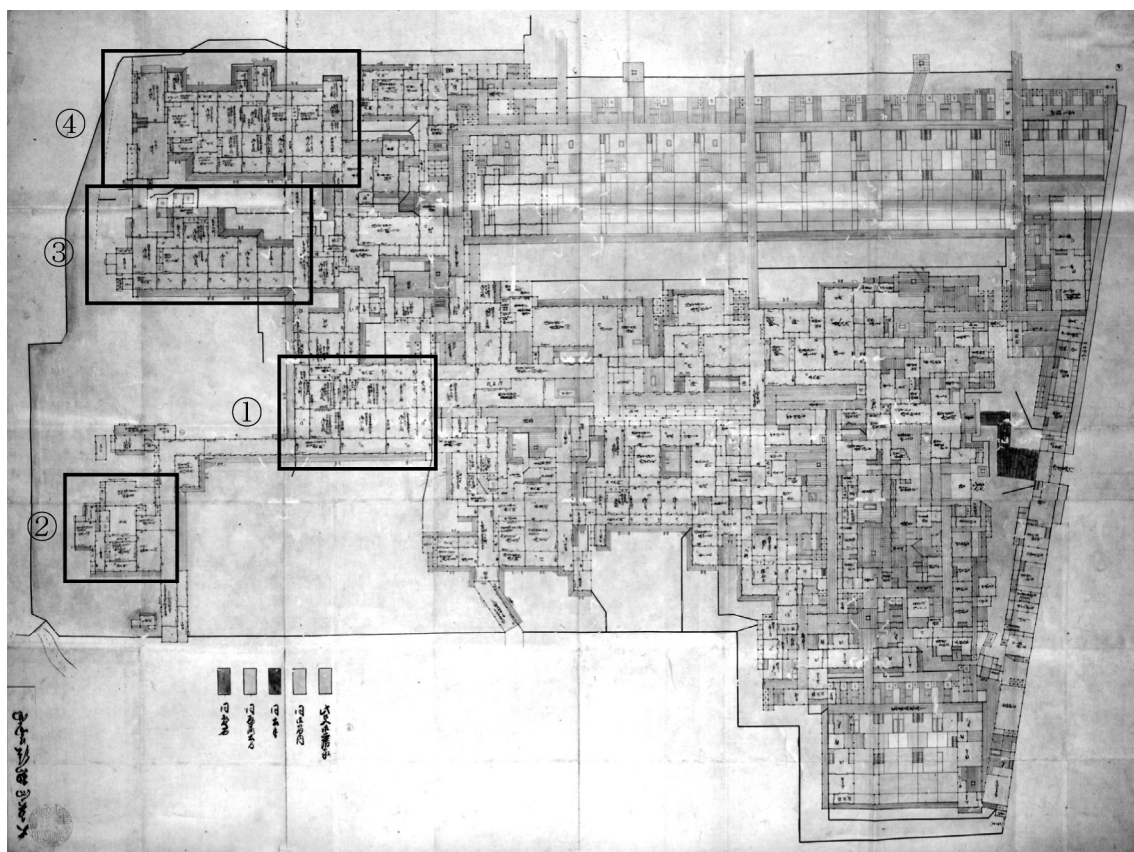
### 1-1 研究目的

本研究は、室内意匠から江戸城本丸御殿大奥の空間構成を明らかにすることを目的としている。近世において上層階級の御殿（住宅）の室内には、御用絵師によって描かれた障壁画や木版多色刷りの唐紙、色塗り壁などにより意匠が施された。

本稿では、万延度本丸御殿大奥の壁面・建具と天井に用いられた意匠のうち、障壁画と唐紙の使い分け方とその要因について明らかにすることを目的とする<sup>1</sup>。

御殿の室内意匠の研究については、障壁画に関するものが主で、江戸城諸御殿の障壁画の小下絵（東京国立博物館蔵）に関する美術史・建築史の共同研究に代表されるように、美術史、建築史の分野で進んでいる。

建築史の側からは、西和夫・後藤久太郎・平井聖などによる数多くの研究がある。西は、弘化2（1845）年竣工の江戸城本丸御殿大奥新御殿の障壁画の画題について、将軍の私室である大奥を意識し堅苦しさを減少させた画題を選んでいるとしている<sup>2</sup>。後藤は、御殿の室内意匠について「近世住宅の壁面構成を見ると 長押上小壁の取扱に二つの手法がある。



①対面所 ②上御鈴廊下脇御小座敷 ③御座之間 ④新(松)御殿

図1 『大江戸御本丸大奥向惣絵図』(東京都立中央図書館東京史料文庫蔵)

白土を塗った土塗壁のものと 張付壁として その上に障壁画や唐紙などの装飾をほどこしたものの二種類である。」とし<sup>3</sup>, 障壁画について「武家殿館に於いては表向きの殿舎に「花鳥」を奥向きの殿舎に漢画系の画題を用いる傾向が認められる。」としている<sup>4</sup>。平井は、書院(御殿)の意匠上のおもな特徴は、室内にあるとし、「壁は張付壁で、襖とともに、対面・接客のための書院では金地に極彩色で、居住のための書院では白地に墨絵で多くの場合風景を描いたが、江戸時代の半ばごろから、木版による連続模様の襖紙を用いることも多く」なり<sup>5</sup>, 江戸時代の後半にはその傾向が強まると指摘している<sup>6</sup>。

しかし、御殿の室内意匠における唐紙の使われ方に関する研究はない。これは、先行研究が、室内を障壁画で包む表向きの御殿に集中し、障壁画と唐紙が併用される中奥・大奥(将軍とその家族の私室)に関するものがないためである。

また、幕末期の江戸城本丸御殿大奥の場合、壁面に障壁画・天井に唐紙というように、1部屋で障壁

画と唐紙を併用する 경우가多いが<sup>7</sup>, 障壁画と唐紙の使い分け方について言及している研究はない。

## 1-2 研究方法

江戸城本丸御殿大奥は、大奥の中央と南・西側にある御殿向(將軍の大奥における儀式典礼の場・日常生活の場、御台所・側室などの生活の場)、大奥の東隅と北側にある長局向(大奥に仕える人々の住宅)、大奥の東側にある廣敷向(大奥に仕える男性の仕事場)の3区画からなる。

幕末期に建てられた江戸城諸御殿の室内意匠については、実際の作事に用いられた図面、作事文書、障壁画の小下絵や製作過程を記した日記などの史料が残されている。これらのうち、実際の作事に用いられた図面が残されている万延元(1860)年竣工の万延度本丸御殿大奥の「対面所」,「上御鈴廊下脇御小座敷」,「御座之間」,「新(松)御殿」を対象とする。(図1) これら4つの御殿は、御殿向にある。

これまで筆者は、万延度本丸御殿大奥の主要御殿

について図面に書き込まれている室内意匠に関する記述から、障壁画と唐紙に関する記述を整理してきた<sup>8</sup>。障壁画・唐紙は、襖・腰障子・張付壁・天井に用いられる。障壁画が用いられている場合には図面上に「絵襖」「腰絵障子」「廻り絵張付」「絵天井」、唐紙が用いられる場合には「張付」もしくは、唐紙の刷り色や文様名が記されている。

そこで、本稿では、障壁画と唐紙の用い方について御殿ごとに整理し、障壁画と唐紙の使い分けられ方を明らかにする。

なお、杉戸にも障壁画が描かれる。江戸城本丸御殿大奥において、杉戸は入側と入側の境に立つ事をすでに明らかにしているため<sup>9</sup>、本稿では研究の対象としていない。

### 1-3 史料について

本研究における研究対象図面は、表1に示す10枚である。室内意匠に関する記述方法という視点から研究対象図面を見ると、2種類に分けることができる。

1種類目は、障壁画が用いられている部分に「絵襖」「腰絵障子」「廻り絵張付」「絵天井」、唐紙については「張付」と記されているものである。

これに当てはまるのは、『御対面所絵図（朱）因幡 川村』（清水建設蔵）、『御対面所大廊下呉服之間奥御膳所御仏間壱ノ側長局絵図』（清水建設蔵）、『御小座舗上御鈴廊絵図 棟梁控』（清水建設蔵）、『御小座舗上御鈴廊下絵図（朱）川村氏』（清水建設蔵）、『御小座舗上御鈴廊下絵図（朱）清水方』（清水建設蔵）、『（朱）二番 御座之間絵図 六分毛（朱）清水棟梁控』（清水建設蔵）、『御座之間絵図（朱）清水

表1 万延度本丸御殿大奥図面における室内意匠に関する記述

	対面所		上御鈴廊下脇 御小座敷		御座之間		新（松）御殿	
	絵	唐紙	絵	唐紙	絵	唐紙	絵	唐紙
『大奥向惣絵図』 （東京大学史料編纂所蔵）	○	文様色	○	文様色	○	張付	○	文様色
『大江戸御本丸大奥向惣絵図』 （東京都立中央図書館東京誌料文庫蔵）	○	文様色	○	文様色	○	張付	○	文様色
『御対面所絵図（朱）因幡 川村』 （清水建設蔵）	○	張付	—	—	—	—	—	—
『御対面所大廊下呉服之間奥御膳所御仏間壱ノ側長局絵図』 （清水建設蔵）	○	張付	—	—	—	—	—	—
『御小座舗上御鈴廊絵図 棟梁控』 （清水建設蔵）	—	—	○	張付	—	—	—	—
『御小座舗上御鈴廊下絵図（朱）川村氏』 （清水建設蔵）	—	—	○	張付	—	—	—	—
『御小座舗上御鈴廊下絵図（朱）清水方』 （清水建設蔵）	—	—	○	張付	—	—	—	—
『（朱）二番 御座之間絵図 六分毛（朱）清水棟梁控』 （清水建設蔵）	—	—	—	—	○	張付	—	—
『御座之間絵図（朱）清水方 川村氏』 （清水建設蔵）	—	—	—	—	○	張付	—	—
『松御殿向絵図（朱）依田持 川村氏』 （清水建設蔵）	—	—	—	—	—	—	○	張付



方 川村氏』(清水建設蔵),『松御殿向絵図(朱) 依田持 川村氏』(清水建設蔵)の8枚である。これら8枚の図面は,「対面所」,「上御鈴廊下脇御小座敷」,「御座之間」,「新(松)御殿」について,それぞれ1枚ずつ示したものである。先行研究によると,「川村氏」「清水方」など,万延度本丸御殿作事の際,各建物を担当した役人の名前が書き込まれている<sup>10</sup>ことから,実際の作事に用いられた実施図または竣工図であると考ええる。

2種類目は,障壁画が用いられている部分には「絵襖」「腰絵障子」「廻り絵張付」「絵天井」,唐紙が用いられている部分には刷り色や文様が記されているものである。

これに当てはまるのは,万延度本丸御殿大奥全体を示す『大奥向惣絵図』(東京大学史料編纂所蔵)(以下,『史料編纂図』と略記する),『大江戸御本丸大奥向惣絵図』(東京都立中央図書館東京誌料文庫蔵)(以下,『東中図』と略記する)の2枚がある。『史料編纂図』は,年記などはないが,薩摩藩に伝わったことがわかっており伝来経緯が明らかな図面である。薩摩藩は,13代将軍家定の第3正室篤姫(天璋院)が出た藩である。『東中図』には年記はないが,『史料編纂図』と酷似していて,清水建設蔵の8枚の図面と内容がほぼ一致することからも,万延度の図面であると考えられる。

## 2 万延度本丸御殿大奥御殿向の室内意匠の構成

これまでの研究で,万延度本丸御殿大奥の「対面所」,「上御鈴廊下脇御小座敷」,「御座之間」,「新(松)御殿」の図面から,障壁画と唐紙が用いられる部分について整理してきた。その結果,壁面・建具・天井と障壁画と唐紙の関係には規則性があり,3形式にわけられることが明らかになってきた。

それらは,壁面・建具と天井に障壁画を用いる形式〔絵/絵(格天井)型〕,壁面・建具に障壁画を,天井に唐紙を用いる形式〔絵/唐紙(鏡天井)型〕,壁面・建具・天井に唐紙を用いる〔唐紙/唐紙(鏡天井)型〕の3形式である。

万延度本丸御殿大奥の各御殿・各部屋の室内意匠を以上の3形式に当てはめ,室内意匠の構成をまと

めたのが表2である。

## 3 御殿別にみる室内意匠の形式について

近世の上層階級の御殿(住宅)は,用途別にいくつかの御殿が建てられ,御殿内は主に用途と使用者によって複数の部屋割がなされている。

本項では,先に挙げた3形式の用いられ方を御殿毎に整理し,各部屋における室内意匠の構成をみる。

### 3-1 対面所(図2)

対面所は,江戸城本丸御殿大奥の中で,式日や儀式典礼などが行われ,新築時には建築儀式が行われる格式の高い建物である。

対面所は,御上段之間(北に床と棚,東に御帳台構,西に付書院)・御下段之間・二之間・三之間・台子之間・千鳥之間,入側からなる。

〔絵/絵(格天井)〕型の部屋は,御上段之間・御下段之間・二之間・三之間である。『史料編纂図』・『東中図』によると格天井の格子の間に描かれた絵は纏綿極彩色である。

〔唐紙/唐紙(鏡天井)〕型の部屋は,台子之間・千鳥之間・入側である。

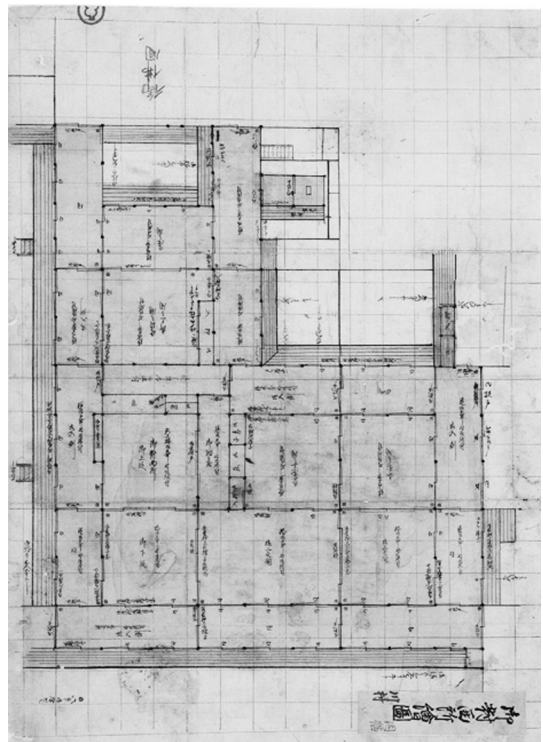


図2 『御対面所絵図(朱) 因幡 川村』(清水建設蔵)



### 3-2 上御鈴廊下脇御小座敷 (図3)

御小座敷は、将軍と御台所・側室が日常的に対面し、将軍が大奥に泊まる際に用いられた建物である。

御小座敷は、御上段 (西面に床と棚)・二拾畳之間・続之間・蔦之間・三畳之間・西之廊下・南入側・北入側からなっている。

〔絵/唐紙 (鏡天井)〕型の部屋は、御上段・二拾畳之間・蔦之間・三畳之間である。

〔唐紙/唐紙 (鏡天井)〕型の部屋は、続之間・南入側である。

北入側の室内意匠については、図面に室内意匠に関する記述がないため明らかではない。

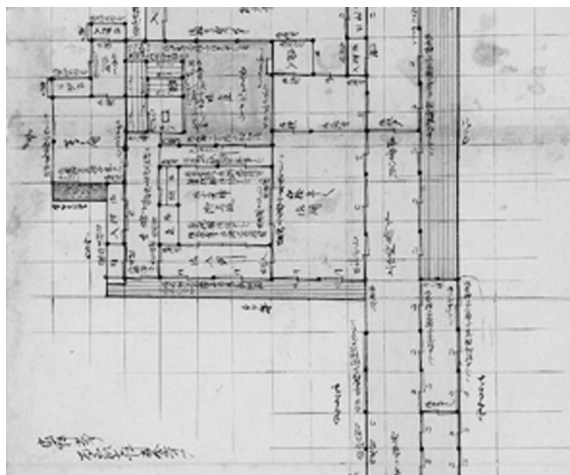


図3 『御小座敷上御鈴廊下絵図 (朱) 清水方』 (部分)  
(清水建設蔵)

### 3-3 御座之間 (図4)

御座之間は、月に三回、表向きで行われる月次の儀礼後に将軍と御台所とが対顔するなど、日常的な対顔に用いる御殿で、将軍の居間である。

御座之間は、御上段 (北側に床・違棚)・御下段・二之間・三之間・建継之間・御小座敷 (西側に床・違棚)・清之間 (北・南側に神棚)・大清之間・溜と、これらの部屋を囲む入側からなっている。

〔絵/唐紙 (鏡天井)〕型は、御上段・御下段・二之間・三之間・建継之間, 〔唐紙/唐紙 (鏡天井)〕型の部屋は、御小座敷・清之間・大清之間・溜・入側である。

### 3-4 新 (松) 御殿 (図5)

新 (松) 御殿は、御台所の居住する御殿である。

新 (松) 御殿は、御上段・御下段・二之間・三之間・御休息・切形之間・化粧之間・納戸・次・拾畳之間・清之間・清之間続之間・御小座敷と入側からなっている。

〔絵/唐紙 (鏡天井)〕型は、御上段・御下段・二之間・三之間・御休息・化粧之間である。

〔唐紙/唐紙 (鏡天井)〕型は、切形之間・納戸・次・拾畳之間・清之間・清之間続之間・御小座敷・入側である。

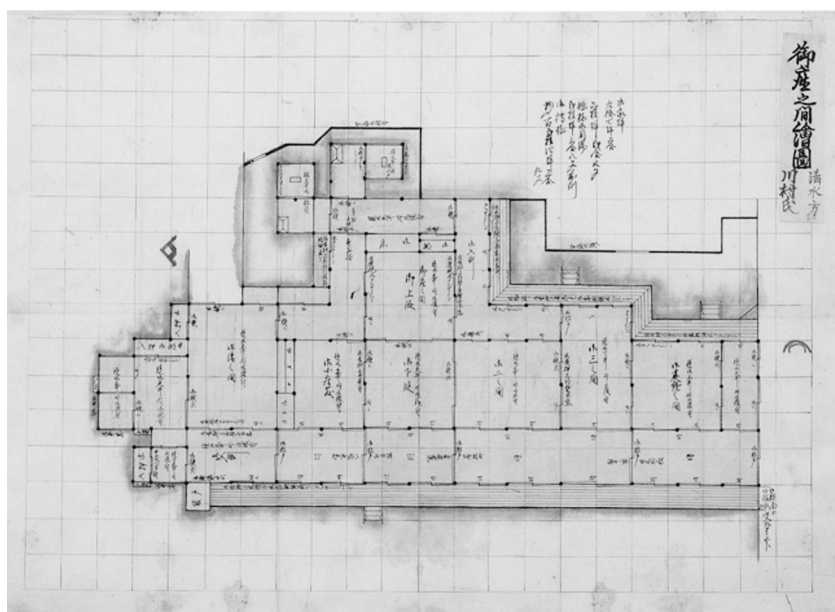


図4 『御座之間絵図 (朱) 清水方 川村氏』 (清水建設蔵)

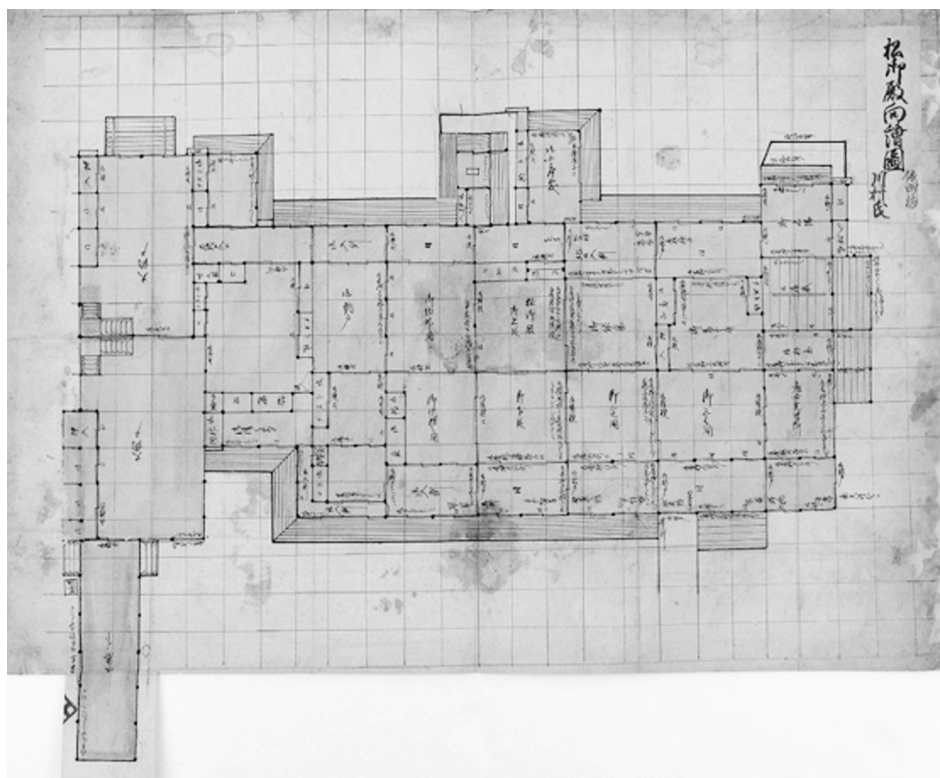
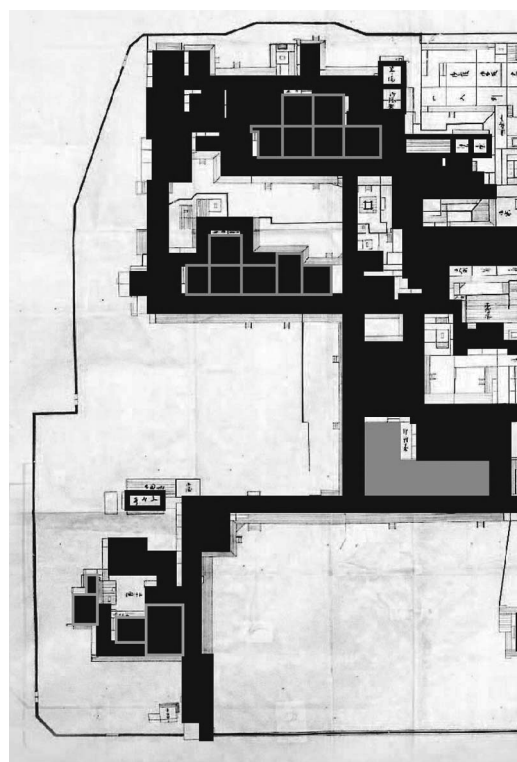


図5 『松御殿向絵図（朱）依田持 川村氏』（清水建設蔵）



凡例

- 絵/絵 型
- 絵/唐紙 型
- 唐紙/唐紙 型

本図は、『奥向総絵図』（平井聖蔵）に室内意匠の3形式をプロットしたものである。

図6 万延度本丸御殿大奥主要御殿における室内意匠の構成

表2 万延度本丸御殿大奥における室内意匠の構成

御殿名	部 屋 名	絵/絵	絵/唐紙	唐紙/唐紙	主たる使用者 <sup>11</sup> （廊下・入側を除く）		
					将 軍	御台所	女 中
対面所	御上段之間	○			○	○	
	御下段之間	○			○	○	○
	二之間	○					○
	三之間	○					○
	台子之間			○			○
	千鳥之間			○			○
	入 側			○	—	—	—
御上御小座敷廊下敷脇	御上段		○		○	○	
	二拾畳之間		○				○
	続之間			○			○
	蔦之間		○		○	○	
	三畳之間		○				○
	西之廊下				—	—	—
	南入側			○	—	—	—
御座之間	御上段		○		○	○	
	御下段		○		○	○	○
	二之間		○				○
	三之間		○				○
	建継之間		○				○
	御小座敷			○	○	○	○
	清之間・大清之間			○	○	○	
	溜			○	不 明		
	入 側			○	—	—	—
新（松）御殿	御上段		○			○	
	御下段		○			○	
	二之間		○				○
	三之間		○				○
	御休息		○			○	
	切形之間			○		○	
	化粧之間		○			○	○
	納 戸			○		○	○
	次			○	不 明		
	拾畳之間			○	不 明		
	清之間・清之間続之間			○		○	○
	御小座敷（西側）			○		○	
	御小座敷（東側）			○		○	
	入 側			○	—	—	—



## 4 まとめ

本稿では、万延度本丸御殿大奥の壁面・建具と天井に施された障壁画と唐紙の用いられ方について明らかにすることを目的とした。

その結果、つぎの2つのことが明らかになった。

(1) 室内意匠にみる万延度本丸御殿大奥の構成には、壁面・建具・天井、すべてに障壁画を用いる〔絵/絵(格天井)〕型、壁面・建具には障壁画を天井には唐紙を用いる〔絵/唐紙(鏡天井)〕型、壁面・建具・天井の全てに唐紙を用いる〔唐紙/唐紙(鏡天井)〕型の3形式がある。(図6)

〔絵/絵(格天井)〕型は、主として、将軍・御台所が公式対面に用いる対面所にみられる。対面所は、大奥における最も重要な御殿である。〔絵/唐紙(鏡天井)〕型は、主として、大奥における将軍・御台所の私室、〔唐紙/唐紙(鏡天井)〕型は、主として、将軍・御台所に仕える人々の控えの間や入側に用いられている。

障壁画・唐紙の使い分け方からみると、将軍が関わる最も重要な部屋から順に〔絵/絵(格天井)〕型、〔絵/唐紙(鏡天井)〕型、〔唐紙/唐紙(鏡天井)〕型と使い分けしている。

(2) 室内意匠にみる万延度本丸御殿大奥の構成を御殿ごとにみると、1棟の御殿内で〔絵/絵(格天井)〕型と〔絵/唐紙(鏡天井)〕型、〔絵/唐紙(鏡天井)〕型と〔唐紙/唐紙(鏡天井)〕型、2つの形式を併用している。このことは、1棟の御殿の中で、使用者が誰であるかにより室内意匠を切り替えていることを裏付けている。

**謝辞** 本研究にあたり、東京都立中央図書館特別文庫室、清水建設㈱には、史料の閲覧・掲載に際し、便宜をはかっていただきました。記して謝意を表します。

## 註

- 1 本稿で研究対象とする御殿の室内意匠については、すでに拙稿において発表している。  
「幕末期江戸城本丸御殿大奥対面所の室内意匠」『学苑 2月号 人間社会学部紀要』昭和女子大学紀要 No. 808, 2008. 2

- 「幕末期江戸城本丸御殿大奥御小座敷の室内意匠」『学苑 3月号』同上 No. 809, 2008. 3
- 「幕末期江戸城本丸御殿大奥御座間の室内意匠」『学苑 8月号』同上 No. 814, 2008. 8
- 「幕末期江戸城本丸御殿大奥新御殿の室内意匠」『学苑 10月号』同上 No. 816, 2008. 10
- 2 西和夫「弘化度江戸城本丸御殿の障壁画」『江戸城』小学館 昭和61年 pp. 50-60
- 3 後藤久太郎「近世初期の住宅に於ける張付小壁について」『日本建築学会学術講演会梗概集(九州)』昭和47年 pp. 1313-1314
- 4 後藤久太郎「近世初期住宅に於ける障壁画題について」『日本建築学会学術講演会梗概集(北陸)』昭和49年 pp. 1533-1534
- 5 平井聖「日本の近世住宅」『日本の近世住宅』鹿島出版会 昭和43年 p. 211
- 6 平井聖「近世 I 総論 1.4.4 色付・土壁・唐紙」『新建築学大系: 2 日本建築史』彰国社 平成10年 pp. 384-386
- 7 註1参照
- 8 註1参照
- 9 註1参照
- 10 伊東龍一「江戸城の作事と各図解説」『江戸城 I (城郭)』至文堂 平成4年 p. 273
- 11 使用者については、永島今四郎・太田賛雄「居住総論」『朝野叢書 千代田城大奥 上』明治25年 朝野新聞社 pp. 121-136 を元に筆者が判断した。

(おがい まさこ 現代教養学科)